
さよならは言わないで。

木下紗奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならは言わないで。

【Nコード】

N1717F

【作者名】

木下紗奈

【あらすじ】

リーシャが冬休みに出会ったのは、右手に義手を持つ黒髪の青年。暇を持て余していたリーシャはついその青年の後を追う。その先で見た光景に、リーシャは異世界へと巻き込まれる事となる――

序章 彼と私（前書き）

戦闘物です。故に銃・剣等が登場しますし、流血表現などもあり（かも）。

縦読み推奨。

序章 彼と私

【死】と隣り合わせの世界。

「希望」の文字なんてその世界にはなくて、常に【死】と戦わなくてはならなくて。

彼は常に、私を【死】から守らないといけなくて。

ねえ、そんな世界に居て飽きないの？

嫌にならないの？

私はいつもそう聞いて、彼はいつもこう答えるんだ。

「――それが、俺の宿命さだめですから」

第一章 第一話 義手青年を追跡

一 義手青年を追跡

家に帰って何をしよう。ポケットに手をつ突っ込みマフラーに顔を埋めて、リーシャは黙々と考えていた。ちらほらと雪が舞う街中をゆっくりと歩く。「ホワイトクリスマスか」と呟いて、なんだか悲しくなった。自分は一人で歩いてるのに対して周りはカップルばかりだし、家で待ってくれる人も居ない。寂しさを紛らわせるために街に出たのが失敗だったか。

と、下を向いて歩いていた所為で前から人が来ているのに気付かなかった。避けなかった向こうもどうかと思うが、真正面からぶつかって鼻が悲鳴を上げる。

「痛った……」

鼻を右手で押さえて顔をあげる。右目を黒髪で隠した青年の無愛想顔がこつちを見ていて、思わず身をすくめた。自然と視線が下がり、その青年がポケットに突っ込んでいる右手に目が行く。

「義手……?」

呟いて、しまった、と思ったときにはもう遅かった。その青年はリーシャと同じようにしまったとも言っような顔を見ると、逃げるように人垣を掻き分けてどこかへ逃げるように去ってしまった。

「あ……」

まだ謝ってないのに。いや、向こうも謝ってないから別にこつちだけが謝る義理は無いのだが、それでもなんとなく謝りたくなって、リーシャはいつの間にかその青年の背中を追っていた。

自分の脚力と走力にはそれなりに自信がある。百メートルぐらい走って、さっきの姿を見つけた。とっさに物陰に隠れたのだが、なんで隠れないといけないのか分からなかった。別に出て行ってもいいのだが、なんとなく尾行が楽しそうだったのでそのまま隠れてついていく事にした（これがストーリーカーになるなんてことは思いもしなかった）。

第一章 第二話 スラムの一角で

二 スラムの一角いっかくで

「うー……」

物陰に隠れながら、リーシャは一人呻うめいていた。

義手青年を追っていたのはいい（いや本当はよくないが）。ただ、まさかこんなところに来ると思わなかったのである。

スラム街がい。さっきの商店街から路地裏に入って少し行くと、そこはもう荒れ果てたスラムで。それなりに大きなこの街だが決して治安がいい訳ではなく、一度ひとたびここに入るともう二度と出てこられないと言っ噂うわさまである。スラムにはまだ入ったばかりだが、今戻ってももう無理なのかもしれない。

だが、前を歩く青年はスラムの住人と言っような感じではなかった。義手ではあるが服も肌も清潔そのものだし、もしかしたら噂は嘘なのかもしれない。

「……あつ」

気がつけば青年の姿は視界になかった。慌てて、それでも足音に注意して駆ける。さっきまで青年が居た辺りに立ち視線を動かすと、その青年は小さな路地の角を曲がるところだった。

「ひゃあつ！」

ゆっくりと後を追おうとして、不意に聞こえた金属音に飛び上がりかける。足音には注意していたのだが、足元には注意していなか

ったようだ。知らぬ間に空き缶を蹴っていた。

「あ、ああ、危な……」

口元を両手で押さえ声を抑える。早く追わないと見失うが、パニックしていても静かに追える状況ではない。そもそも、なぜ彼を追う様な事になったのだろうか。そう考えて、自業自得だと反省する。興味本位で尾行してスラムに入り一人残る。リーシャの勝手な行いの罰のようであった。

「……と、とにかく追わないと」

もはや尾行の気は失せていた。一人スラムを抜けるために彷徨^{さまよ}うより、「スラムの人じゃなさそう」な人と二人で居る方がましだと、リーシャは結論付けたのである。

見失った、と言えるのだろうか。青年が曲がった角をリーシャも曲がると、そこは突き当たりだったのである。

「見失った？ 消えた？」

どちらも似たようなものではあるが、とにかく彼を探さなくてはいけない。しかし曲がり角から五メートルで途切れたその路地には抜け道などありそうになかった。

「見失った、か……。どうしようかな」

こうなれば一人でスラムを歩かなければなるまい。スラムがどんな場所なのかまだ分からないが、物騒な事は避けたかった。

「はあ……」

突き当たりの壁に寄りかかろうと、全体重を後ろにかけるように背中を動かす。そのまま背中が壁に近付き、

壁をすり抜けた。

「きゃあああ!？」

腰に手を添えて仰け反るわけではない。背中から後ろに倒れていくのが分かって、リーシャは足掻^{あが}く。手を虚空^{こくう}に向かって伸ばすが、その手を掴む者は居ない。背中に来るであろう衝撃に恐れ目を閉じ

体を、優しい感触が包んだ。

第一章 第三話 決まるのは己の宿命

三 決まるのは己の宿命おのれ さだめ

「きゃああー!？」

悲鳴を聞いて、グレイは慌てて振り返った。誰かにつけられているのは分かっていたが、まさかここまで入ってくるとは思ってもみなかったのである。

後方で、栗色のツインテールが倒れるのが分かった。駆け寄ってみれば、それはやはりあの時の少女で。最悪な結末が想像できて、グレイは思いつきり眉をしかめた。

腕を引っ張り、無理矢理立たせる。途端、右手につけたブレスレットのアクアマリンが眩く光って、グレイはため息をついた。

「リル、こいつどうする?」

「え……?」

さっきの義手青年が目の前に居る事にも驚いたが、それよりも更に驚いたのは、周りの風景だった。さっきまでの閉塞へいそくてき的なスラムではない。壁はなく、辺り一面には草が生い茂お しげっている。空は闇に包まれ、その夜空を彩るのは三日月のみ。まるで夜の草原だった。

「リル、こいつどうする?」

その声で我に返れば、あの義手青年は右手につけたブレスレット

に話しかけていた。プレスレットについているアクアマリンが眩く光って、白い右腕を明るく照らし……と、そこでリーシャは矛盾に気付く。

「義手が……？」

さつきまで、この青年の右腕は義手だったはずだ。なのに今は普通の右腕と化している。更に驚くべき事に、アクアマリンから青白い光の球体が現れたかと思うと、それは変形してある形を取った。緩やかなウェーブのかかった長い髪、全体を包み込む白いフリルワンピース。リーシャの四分の一もない大きさのそれをあえて形容するならば、お伽話に出てくる妖精であろう。

『あら、驚かせてごめんなさい』

リルと呼ばれた小さな女性が微笑む。非現実的すぎて混乱しているリーシャは、現状を全く理解できない。

『リーシア・カトリシア、通称リーシャ。十七歳で一六五センチ、趣味は読書とスポーツね？』

さらにピタリとプロフィールを言い当てられてしまって、パニックになってしまう。

「え、え！？ 何で知ってるんですか！ って言うか、妖精ってほんとに居——」

「うるさい」

「痛^{いた}っ」

ぺしりと叩かれ頭を抱えて顔を上げれば、物凄く面倒なことを抱え込んだかのような顔をした青年の姿。

「ったく、どうしてくれる……何であんなんかが俺の ^{クイステラ} 王女 に

……」

クイステラ、の意味はわからなかったが、お前なんかが、という所になんだかむかついたリーシャはついむきになって言い返す。

「私なんかがって何よ！ いきなりこんな意味不明な場所に連れてきておいてよく言うわ！」

「いや、あんたが勝手についてきたんだろっよ……」

なんとかこいつを クイステラ 王女 から外せないだろうか。そう思案していたグレイは、あることを思い出す。

「きやつ!？」

手持ちぶたさにぶつぶつ文句を言っていたリーシャの手を唐突に掴むと、袖を一気に捲り上げた。

「え、なっ、ちよつと……」

リーシャの動揺も耳に入らず、腕を見回す。二の腕に刻まれた証を見つけ、グレイは膝を折った。

ちくしょう、これじゃあ クイステラ 王女 決定じゃなかよ……。

リーシャの右の二の腕には、十字架にZをくつつけたような形の紋章が浮かんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1717f/>

さよならは言わないで。

2010年10月9日21時15分発行